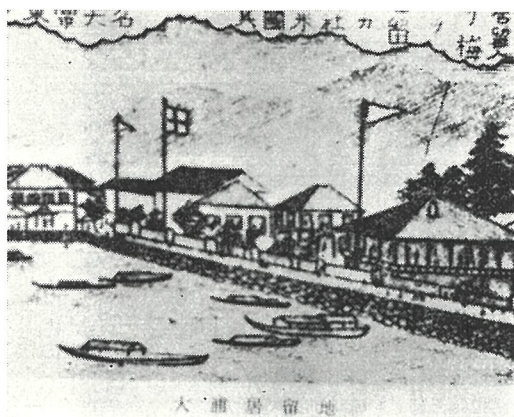




同志社 歴史散歩

長崎

青山武雄

長崎港に漂うバイブル

去る昭和卅七年十二月長崎の寓居で、八十才の天寿を全うした太田寛は、備前岡山の人。十四才にして笈をおうて上洛、同志社に投じ、さらに米國に遊學、パシフィック・セミナリーで研さんを積むこと四カ年、明治四十年B・Dの学位を飾って帰朝。以来長崎に住居を定めて五十年、生涯の大半をブラジル國名譽領事として、兩國親善のため全力をつくし、文字通り同志社精神を具象化した、長崎同志社マンの大先輩である。彼は生前、同志社時代を回顧して、級友の山室軍平や、その他の大先輩の消息を好んで語ったが、偶々筆者が村田若狭の物語をすると「その村田の息子が同志社に学んでいてね、問題の聖書ならたしか同志社に寄贈されて、チャペルの説教台の上にもいつでも置いていたよ」と、おもいがけないことを述懐してくれた。

右の物語のいきさつはつぎのとおりである。村田若狭守は佐賀鍋島藩の御親類一門で肥前久保田の城主である。偶々嘉永七年、英國軍艦の長崎入港に際し、沿岸警備についていたが、ある日港内巡視に出て、海上に漂流

する一冊の洋書を発見、拾いあげたが、何が書いてあるかさっぱり判らない。オランダ通事に聞くとヤソ教のバイブルだという。若狭はその本の内容を知りたくてたまらない。漸く中国より漢訳聖書を手に入れて、ひそかに研究をつづけた。しかし独り読んでも真意がつかめない。解いてくれる人はいないと、ひそかにもとめていた。そして安政六年米國より宣教師として來朝したのが、かのフルベッキである。早速息子の綾部をつかわして、彼を通じて間接に教をうけた。慶応二年五月十四日、身分高き人の使者がフルベッキを訪ねて、主人が会いたいと伝えた。やがて人をさけて、フルベッキを訪ねてきたのが若狭その人である。フルベッキは若狭の心境の進歩と強固な決心を知って、この年のペンテコステの日に、邸を嚴重に密べいして、彼と息子の綾部、従者の本野に洗礼を授けた。若狭ほどの地位高い、身分の人で、授洗したのは日本プロテスタント史上、最初である。

右のゆかりの聖書が同志社にあるというので、早速同志社を調べたが、どこにもない。先生方に聞いても誰も知らない。帰ってその旨太田翁に告げると、暫く小首をかしげて、

記憶を辿っていたが、「そうだ、村田の息子が退学して同志社を去った日からその聖書は消えてなくなった。多分その息子が持ち去ったのだろう、と当時もつばらの評判であった」と云々。

熊本洋学校のアイデア

海老名、小崎、宮川、浮田と超特級の人物を開校早々の同志社に送りこんだのは、熊本洋学校のキャプテン・ゼーンスである。仮にこれらの人物を取去るとすると、九十年の同志社人物史の山嶺は大巾にけずらねばならぬであろう。その熊本洋学校のアイデアは長崎で生まれている。着想者が肥後の横井小楠の甥、横井大平であることは案外知られていない。

大平は小楠の意をうけ、兄左平太と共に慶応元年頃来崎して、フルベッキに師事し、英学を学んでいたが、渡米の志やみがたく、フルベッキの紹介状を携えて米国ラドガース大学に入学している。大平は滞米すること三年、不幸にして肺を病み帰朝、長崎に滞在して、専ら療養をしていたが、その間に心を往來したのが洋学校設立の構想である。このアイデアのかなめはアメリカ人教師を招聘し、これ

に直接学ぶことである。この構想を野々村孝志に話し、さらに小参事山田武甫を通じて知事護久公に進言した。しかし肥後は排外思想の本場―外国人を招くことには仲々決心がつかない。ついにアメリカ人でも武士なら良からうというので話がまとまった。小躍りした大平は早速フルベッキに連絡、彼のあつせん、明治四年八月熊本に迎えたのが、南北戦争に輝いた武勲を立てたゼーンス大尉である。そこで大平は長崎を引きあげ、洋学校の一室に住みこみ、開校の準備を行なっていたが病状が急変して、明治四年四月三日、廿二才の若さで永逝している。

熊本洋学校のゼーンスのもとには肥後よりぬきの青年たちが集まった。これが彼の感化でクリスチャンになり、クリスト教で日本を救うのだと、花岡山で一大誓約を行なった。世にいう熊本バンドの誕生である。

大隈重信とフルベッキ

慶応の福沢も、早稲田の大隈も、立教のウイリアムズも長崎と切りはなすことのできない人物である。なканずく大隈は文久元年頃から来崎してフルベッキの門に入り、国際法、

聖書などを学んでいる。慶応元年より副島と共同してフルベッキをかつき、私立学校「致遠館」を設立し、経営している。この私学経営に味をしめたとみえ、明治十四年、政変によつて下野するやいなや今日の早大の前身、「東京専門学校」を創設している。因に致遠とは易から取ったもので、「深きをとりと遠きをきわめる」の意で、国家永遠の策を講ずるのが主旨である。出資者は佐賀藩であるが後に拡張費と称して佐賀商人などから募金している。この校舎が現存してあることを最近みつけた。いづれにしても十年近い青年時代の長崎での生活、フルベッキへの師事、これらが大隈の人間形成にいかに役立っているかは、今後の研究課題であらう。なお同志社大学設立に際しての新島と大隈との交渉、早稲田における浮田、大西、安部の活動、さらに幕末の長崎を語るとき、絶体逸することのできないフルベッキ、これらについては稿を改めて書くことにする。

(校友・昭四専神 長崎外語短大長)